

ヒゲの効用あるいは支配の構図  
— エーリッヒ・ハックル『ヴァンバ王』をめぐって —

日 野 安 昭

外国語教室

(1995年9月1日受理)

Wirkungen des Barts oder Strukturen der Herrschaft  
— Zu Erich Hackls Märchen "König Wamba" —

Yasuaki HINO

*Seminar der Fremden Sprachen*

(Received September 1, 1995)

In seinem 1991 erschienenen Kunstmärchen "König Wamba" erzählt der österreichische Schriftsteller Erich Hackl von der Gleichberechtigung der Frau und dem erfundenen Herr-Diener-Verhältnis.

Wie kommt man zur Herrschaft über die anderen? Und warum muß man unter der Herrschaft der anderen stehen? Worin liegen dabei die Gründe dafür? Ist und bleibt das herrschaftsfreie Zusammenleben der Geschlechter eine Utopie? Diese schwer zu beantwortenden Fragen von heute stellt Hackl in diesem Werk und versucht, einen neuen Weg zum harmonischen Zusammenleben von Man und Frau zu finden.

Eimal dauerte der Winter im Land, wo das Volk der Goten wohnte, sehr lang und schien kein Ende zu nehmen. Vor eisiger Kälte zitterten die Goten. So entschieden sich die Goten, westwärts, der Sonne nach, fortzugehen, weil sie nicht mehr in ihrem Land bleiben und leben konnten. Aber ihr Land verließen nur Männer, Frauen und Kinder blieben dort. Nach langer beschwerlicher Reise fanden die Goten endlich ein ihre Wünschen erfüllendes Dorf und ließen sich dort nieder. In dem Dorf befanden sich aber nur Frauen und Kinder, kein Mann war zu sehen. Eine Gruppe bestand also aus Männern und eine andere aus Frauen und Kindern. Jeder Gruppe fehlt das andere Geschlecht.

Die Goten hatten einen König, aber in diesem Dorf gab es keinen König, der "Befehle geben" soll. Da erklärte Wamba, der König der Goten, sich selbst als König in diesem Dorf und zwang die Frauen, seine Dienerin zu sein. Männer sind Herren und Frauen Dienerinnen, so behaupteten die Goten, weil sie einen Bart hatten. So entstand die Herrschaft der Goten über die Frauen. Den Bart benutzten die Goten hier als Symbol für Macht und Machthaber. Das ist jedoch eine Fiktion, eine von den Goten erfundene Geschichte. Die ähnliche Geschichte wie diese könnte man aber in der Welt oder in unserem alltäglichen Leben nicht schwer finden und lesen, wenn man nur vorsichtig wäre.

Der Bart symbolisiert einerseits die Gesamtheit der gotischen Kultur, die das Volk der Goten fest behalten soll. Andererseits stellt er sich als Ausdruck der Weltanschauung, Wertvorstellung, Lebensweise der Goten heraus. Als die Goten ihren Bart verloren haben, ist es erst möglich geworden, ein neues ruhiges Leben mit den Frauen im Dorf zu führen.

ひとがひとを支配するということが、それはいかなる根拠のもとに正当化されるのか。ひとはどのようにして他の者をみずからの支配下においていくのか。また支配者はなにゆえ男であるのか。女はなぜ服従し、隷属しなければならないのか。だれが命令を下し、だれがその命令に服さなければならないのか。またその命令がいかに理不尽であろうとも服さなければならないのか。支配者のいないところではひとの生活はありえないのか。共同体とひとの意識とのかかわりはどのように形成されるのか。こうした問題をオーストリアの作家ハックルが描く『ヴァンバ王』は読者に投げかけてくるだろう。作者ハックルは西ゴート族とその王の物語に仮託して時代を遠く遡りながら、支配・非支配の発生とその関係、女性の解放、男女の役割、夫婦と家族の物語を語る。

メルヒェンと銘うたれたこの物語には、旅、冒険、異境、別れ、出会い、発見、成長といった物語の持つ諸要素が取り込まれていて、巧みな筋建てのなかで話が展開して行く。

話はいまから1313年前のこと。ゴート族の住む地ではいつ終るともしれぬ永い冬が続き、雪は何メートルも高く積もり、さすがのゴート族たちもその寒さに震え、ついに暖かい地に移り住みたいと願うものが出始めた。もちろんその長引く冬のために作物は思うような収穫もえられず、家畜も多くを失い、狩猟による獲物も著しく減ったにちがいない。つまりはかれらがそれ以上その地にとどまり、生命を維持していくことは困難な状況が生まれてははずだ。土地は人々を養う能力を失った。ことは天候不順による耐え難い寒気ばかりでない。寒気はまたその地に住まうものたちに飢えをもたらし、人々の生存を危機におとしめた。寒さと飢えに震えながらゴート族は陽光の輝く豊かな土地を夢見始める<sup>1)</sup>。こうした一族の生死にかかわる切迫した状況にいたって、ひとびとは王に移住を願いでる。

ゴート族は、作者ハックルによれば「背が高く、屈強で青い眼をしていました。よく空をじっと見ていたからです。かれらは石の家に住んでいました。その屋根は平らで、春になると毎年シクイをぬりかえました」(7)。かれらゴート族は王をいただき、その王の名は「ヴァンバ」といった。ゴート族の男たちはみなヒゲをたくわえていて、なかでもヴァンバ王のヒゲは最も長く「足元にまでとどきました」(7)。

ゴート族の社会は、作者の説明に見られるとおり、王を頂点とする王権社会、階級社会である。王の下には公爵や伯爵、医師や宮廷詩人、あるいは狩人や兵士たちがいた。これらはすべて男であることから明らかなように、男を権力の中心にすえた社会でもあり、男を中心に

構成された社会でもある。

長い冬とそれにもなう飢餓はおそらくはまず男たちの存在の基盤をゆるがしていっただろう。狩猟や農耕といった生産活動と住民の安全を護る武力、それらがまったくその意義を疑われかねないところに追い込まれてしまったはずだ。それらが発揮されるべき場と機会とを自然は奪ってしまった。男たちはなにをもってその存在を誇示し、何ををもってその社会の構造たる王権制を正当化し維持していくことができるのか。おそらくはその基盤をなす部分こそが問われかねない事態に直面していたのだ。

ヴァンバ王は臣下のものたちの進言や願いにもかかわらず、移住には消極的であり、むしろ否定的ですらある。なぜなら戸外はいくら寒いとはいえ、かれの住まう宮殿は「恐ろしく暖房がきいていた」し、「かれは一日中宮殿の食堂で過ごす」(8)ので、人々のいう「寒さ」は切実感をともなって意識されることがない。宮廷詩人のトイデギーゼルも公爵もしきりに王に移住を迫るが、王は首を横にふるばかりだ。宮廷医師兼薬剤師のトゥルガはそこで巧みに王に移住の決意を促す。かれしか王を説得できるものはいなかった(11)。トゥルガはヴァンバ王が抱える持病を逆手にとって王に「転地」と称する移住を説く。「ヴァンバは右足の激しい痛みで泣いていました。またほかに喉も痛かったのです。ことあるごとに氷のように冷たいビールを喉に流し込んでいたからです」(11)。こうしたヴァンバ王の病気を医師トゥルガは「リューマチ」と診断し転地を強く勧める。たくさん陽を浴び、新鮮な空気を吸い、もっと体を動かすべきだと進言する。それでもヴァンバは腰をあげない。いたしかたなくトゥルガは一計を案じ、最新の療法と称して王を蟻の巣の上に坐らせ、蟻酸による治療を施そうとする。たちまち王の尻は火がついたように熱く痛い。これに音をあげたヴァンバはついに移住を決意する。「行こう、太陽を求めて。さすればわしのリューマチもおのずとときえよう」(13)。医師トゥルガの策がやっと効を奏した。

すべてのゴート人がヴァンバ王につき従ったわけではない。女たちと子供たちはその村に残された。男たちだけがこの村を去っていく。女たちと子供たちは夫や恋人や父を見送った。残されたものたちがその地で生存していけるかは問われぬ。また旅立つものたちも命を保証されているわけではない。行く手には辛く厳しい苦難に満ちた旅の日々が待ち受けているのだ。女や子どもを置き去りにすることは決して無慈悲なことではあるまい。むしろ何が起るかもしれない危険に満ちた旅に伴うことこそ、無謀、無分別と言わざるをえないだろう。そしてまたおそらくは厳しい自然環境とはいえ、残されたものたちが糊口をしのぐだけの食料は見込めたのかもしれない

い。

むしろ残された女たちと子供たちだけなら、日々の営みに支えられて十分にその境遇のなかで生き抜いていく知恵と能力を作者は期待し、付与し、承認しているふしすら見受けられる。後にゴート族の一行が新天地の村を見つけたとき、その村には女と子供しかいなかったことを重ね合せてみれば、そこに作者の姿勢を読み取るのもあながちいきすぎとはいえないだろう。去り行くものたちはいまの過酷な自然の下にあってはむしろ非生産者、非労働者でしかあるまい。それは同時に消費するだけの存在でしかない。少ない食料を徒食するもの、生産に与らぬもの、苦境にあって救済者たりえぬものでもある(ヴァンバ王の宮殿での生活はそれを雄弁に物語る)。自然の猛威の前に知恵も能力もなく立ちすくむだけの存在でもある。屈強なる身体も、武力も自然の力の前で無力化されてしまった。しかしそれでも人間の社会がその従前のシステムを保持し続けようとするならば、そのシステムのほころびや矛盾が露呈してくるのは避けられないだろう。それらが露見する前に、ゴート族の男たちはその村を去らなければならない。

ゴート族の社会は、王権社会である。厳しい身分社会でもある。王は王としての威厳を保ち、その臣下たちは、厳しく序列化されている。王も貴族たちも日々の肉体的な活動から遠ざかっている。出発のさいの騒ぎはそのことをあからさまに物語っていよう。出発に当たっても、一般のものたちは支度も手早くすんだが、公爵、伯爵、宮廷詩人、貴族高官たちは手間取ったばかりか、荷物が多すぎて自分たちでは運び切れず、一般のゴート人たちに分け持たせざるをえなかった。

ヴァンバは「王冠を旅のあいだもどうしてもとろうとはしませんでした」(14)。それというのも「王冠をつけてない王様なぞは、鼻もないのに鼻風邪をひいてるようなものだ」(14)と言いたてる。また貴族たちは荷をみずから持てないことがわかると、それをもって互いに身分の高貴さを競い合う。行列もまたうるさい。先頭には王がたち、医師のトゥルガ、公爵、伯爵、宮廷詩人の順につづく。この徹底した身分社会、階級社会こそが彼らの社会の中心的支配的構造である。そしてさらにはこうした王権社会は「男たちの社会」である。また定住地を離れて女たちや子どもたちのいない旅のなかにあっても、この社会秩序が崩されたり、変形されたりすることなく厳然と維持されているのを見れば、これはまた「男たちだけの社会」でもあるといえよう。

「旅は長く、苦難に満ちたものでした。夜はゴート人たちはマントにくるまり、朝にはヒゲについた露をはらい、欠伸をし、歯を磨き、歩き続けました。いつも西を指し、太陽を求めて進みました」(15)。海も越えなければ

ならなかった。「辛い仕事」の末に船を造る。「69日間海を渡り、やっと陸地を見ました」(15)。また別の航海では、イカダに乗って渡るものの、陸地を目の前にしてハリケーンに遭い、岸に打ち上げられたりもした。また陸地にあつては、飢えを満たすために、野草や草の根、名も知らぬ木の実を採って食べ、槍や石弓で野牛や熊を襲いもする。

そうした辛く苦しい旅の末についにゴート族はかれらの要求にかなった目的の村を見つける(17)。「かれらはとても長いこと旅をしていたので、旅の日数を数えようとすると、すでにみんなの両手を借りても足りないほどでした」(21)。山の頂上に立ったゴート人たちの足元には緑なす野原、青くうねる川、銀色に葉裏を光らせる木々、赤褐色の耕作地、そしてそれらの上にはなによりも陽光が穏やかに心地よくそそがれていた。「あそこが気に入った。あの地に腰を落ち着けることにしよう」(16)。そしてその地にかれらはやがて「村」を発見する(17)。ゴート人たちはこの村に奇妙な親しみを感じた。しかしその理由は分からない。「嵐にあって陸地に打ち上げられたときに、ゴート人たちは、自分たちがかつてどこに住んでいたのかも忘れてしまいました。ただひとつのことだけは忘れずにいました。かれらの故郷はかれらにとって異郷となってしまったということです」(21)。

ゴート族の男たちを村人たちは歓待する。「住民たちはこの予期せぬ訪問客を喜びました。そしてあるものたちはこの旅人たちのために食事を用意し始めました。またあるものたちは彼らにワインと水の入ったジョッキをもってきました」(22)。

さてこの村は、この旅人たち、つまりゴート族の男たちとは対照的な社会構成だった。なによりまずその住人である。「この新参者たちは女と子供たちの姿しかみることができませんでした」(22)。ここには女と子供しかいなかった。男たちを欠いた、いわば女たちだけの共同体だったのである。

住人の構成が異なるばかりではない。なによりその共同体としてのいわば社会組織が著しく違う。ゴート人たちの王権制に対して、女たちは王をいだけない。王なる存在を知らない。「『わしはおまえたちの王に会いたい』とヴァンバは言いました。そろそろ仲間同士で話し合いをする潮時だと思えたのです。(中略)『王様ですか』その娘はききかえました。『それは何ですか』そのときヴァンバは口を開けたままものも言えませんでした。王様が何かということを知らない者に、これまで一度だって出会ったことがなかったのですから」(25-26)。村の娘ティーナとのこのやり取りは何とも滑稽である。「王」

なる者が存在しないところでは、人々は王なる言葉はもちろんのこと、その言葉の差し示す具体的なものを想像することはできない。ましてやヴァンバが期待しているように、王なる存在が果たすはずの社会的役割や機能について想像を巡らすことなどできようはずもない。言葉が存在せず、したがって言葉がさし示す具体的対象がないところでは、言葉は内実を失い、その内包する意味を伝達することができない。ただ音があるだけだ。だから「王なるもの」は、ティーナにとっては「ロバ」であり、「鶏」であり、あるいは「カボチャ」にもなりえたのである。「しかし女たちはどう思い出してみてもだれひとりその言葉がかつて聞いたことはありませんでした。『わたしたちは王様なんて知りません』と粉挽き娘が言いました。『わたしたちには王様なんていません。』」(26)。王ばかりではない。「村には公爵も伯爵も宮廷詩人もいませんでした」(26)。この村人たちはついに王なるものが想像できない。その逆に王を権力の中核に据えた身分社会を造るゴート人たちは、王のいない共同体や社会機構、社会システムというものをまるで想像することができない。女たちもゴート族も互いに異なる社会システムを構築しているのである。このふたつの共同体の出会い、どちらにとっても異文化との出会いとも呼べるべきものだ。互いの構成員たちがその違いを克服することが可能なのか、また可能だとすればどのように克服していくのか、克服の道筋をどこにみればよいのか。これもまたこのメルヒェンの大切なテーマであろう。

さらに興味深いことには、そもそもこの村は、ゴート人たちが後にしてきた故郷を彷彿とさせる。この村もまた男たちに捨てられ、女と子どもは置き去りにされたのだった。「ずっと昔、男たちは村を捨てて出ていきました。そして女たちは男たちを思って涙をながしたりしませんでした。間もなく女たちは男たちの傍らで過ごしたかつての生活を忘れていきました」(22)。残された女たちは去っていった男たちを思って涙をながしている暇もゆとりもない。生きていかなければならないという現実を前にして、彼女たちは別れたその瞬間からその地で生存のための戦いを戦っていかなければならなかった。かつて男たちが担っていたかもしれない仕事を分担して負っていったことだろう。家畜の世話や畑地での耕作はいうに及ばず、力仕事や技術的な作業、あるいは外敵の襲撃からも身を護るための戦闘も含めて、生きて生活していくためのすべての活動を分け持ち、こなしていかなければならなかったはずだ。こうしたことを推測させるものとして、作者ハックルが彼女たちを頻繁に職業名で名指していることを指摘することができるだろう。ベラは同時に仕立屋であり、ティーナとオノバは粉挽き娘であり、

マラカは刃物研ぎ師でもある。名前が職業名で代替されていることの意味は、この女と子どもからなる共同体が職能による横のシステム、横のつながりからなる社会を作り上げているということだ。つまりこの村は住人の生活に密着した形で組織されているといえる。おそらくは個人々がそれぞれの能力に応じて生存していくために要求される機能や役割を分担しているであろう様子が容易に想像される。

女と子どもだけの村を訪れるゴート人の男たち。どちらも集団ではあるが、ここにたとえば「母と子」の家庭に突然現われた「男」の図をみて、時代を超えて家族とは何か、離婚あるいは再婚というすぐれて現代的な問題(あるいは人間がずっと抱えてきた共通の問題)を重ね合せ、読み取ることも読者の特権として許されるだろう。

ここで興味深いことは、この村の社会組織とゴート人たちの社会組織との際立った対照である。村はいわば生活(生存)や生産に密着した組織を作り、住民の一人ひとりが欠くことのできない重要な社会的役割を担っている。ゴート人たちは王権の下に組織された身分社会を作り、生産に従事しない特権的な階級を抱え持っている。王がいないということ、このことは何を意味するのか、また王はいかなる機能、権能を持つものなのか。伯爵はこの点に関連して、女たちに次のように尋ねて確認している。「『それではいったいだれが命令を下すのかね』と伯爵は舌うちしながらいきました。『何ですって、命令ですって』。女たちには言われていることがわかりませんでした」(27)。王とは命令を下すもの、ひとに指示を与えるものであることを伯爵は指摘する。言うまでもなく権力者である。当然主をいただく社会は権力の頂点に王を置くタテの階級社会である。

さらにここでこの二つのグループ(共同体)を比較してみれば、ゴート族は男たちだけからなる集団であり、この村は女たちと子どもたちからなる集団だ。この性差は同時に、人間が集団をなしたときどのような構成を取るかを作者ハックルは例示してみせたのかもしれない。腕力や武力といった具体的な力=暴力的な力、あるいはまたそれらの力と不即不離に結びついた権力という抽象的な力、それらはいわば男性的な原理の象徴ともいえよう。一方日常の営みのなかに生の根源を見つめる女たちはより具体的・直接的な力を持ち、その力をみずから汲みだしていこうとする。そこから彼女たちの集団が命令でなく協議を、服従でなく信頼を、恭順でなく連帯を重んじた共同体を構築していくのだ。いわばヨコ社会とも呼ぶべき集団を生み出す。

さて王のいないことを知ったヴァンバはみずからこの村の王となることを、一方的に宣言する。「これよりお

まえたちはやっとなりを得ることになる。慈悲によりおまえたちをわしの家臣とする」(27)。これは女たちの望むことではない。なぜなら「これまでの生活に満足していたし、その生活を変える理由も見当たらなかった」(27)からだ。女たちはヴァンバの臣下となってゴート人たちに仕えなければならない理由を問う。その根拠を問われたゴート人たちは言葉につまる。なぜなら彼らにとってもヴァンバにとっても王をいただいた社会は自明のことであり、命令を下す統率者を持つことも集団として当然あるべき姿だった。その自明のことがいま改めて正面から問われたのだ。疑う余地のないこと、問われるはずのないこと、そうした問題が問われたのであるから、その問いに応えることはなかなか難しい。

返答に窮したヴァンバに代わって宮廷詩人が応える。かれもまた窮しながらも、その根拠を「ヒゲの有無」においた。「あなたたちは私たちに仕えなければなりません。そのわけは、あなたたちにはヒゲがないからです。よろしいですか。支配するものたちにはひげがあります。仕えるべきものたちにはヒゲはないものなのです」(27)。

支配と被支配、命令する者とされる者、その両者の境界を分かちもの、それが「ヒゲ」だとゴート族は主張する。この詩人のあまりに詩的とも呼べそうな論拠を笑うのはやさしい。しかしこれを笑ってばかりもいられまい。これに類する根拠の上に成り立つ現実はいくちもあるだろう。とはいえこの「ヒゲ」という根拠は卓抜である。どのような論拠を挙げるか期待しながら読み進む読者にとってはその奇抜さに一瞬笑いを誘われるが、その笑いはたちまち微苦笑に変わり、その後にはある種の戦慄すら覚えさせられるだろう。ヒゲは敬意の対象であり、権威、権力の象徴でもある。そして従属する者はヒゲを蓄えることができなかつたともいう。<sup>2)</sup>

もともとゴート族の男たちはみなヒゲを蓄えていた(27)。王のヴァンバはいうまでもなく、長いヒゲの公爵、伯爵、トゥルガとみなヒゲを蓄えていた。またヒゲは性差を明確にし強調するものだ。ヒゲはゴート族の男たちが偏愛するものであり、同時にゴート族をゴート族たらしめる象徴的なものだ。言い換えればヒゲこそゴート族のアイデンティティそのものだ。

ここでヒゲの持つ意味を考えてみよう。ヒゲは「男たち」が蓄えるものであり、男にしか持ちえぬものだ。女たちが彼らと同じようにヒゲを蓄えたいと念じてもそれはかなわぬ相談だ。ここでゴート人たちが主張するようにヒゲの有無によって支配者と被支配者とが区別されるとするならば、望んでも決してヒゲを持ちえぬ女たちは生まれつきの「被支配者」ということになる。同時に男は生まれながらにして支配者の側に身を置いていることになる。これはすでに性差に基づいて人間の存在の意味

と社会的機能と役割が生まれながらにして定まるとする見解でもある。こうした見解は、個々の人間の能力や才能や努力や資質にかかわらず、性差が人間の集団のなかでの位置を決定するというものだ。ヒゲはそうした差別化の機能を持たされている。

ヒゲはなるほど支配＝被支配の関係を生み出すものとして働いている。しかしこの支配関係がヒゲという人間の特異な肉体的側面によって規定されていることは、ここでの支配関係が通常用いられる暴力的な方法によってなされているのではないことをも同時に意味している。暴力という破壊的手段によってゴート人と村人たる女たちがこの支配＝被支配の関係のなかに組み込まれていくのではない。確かに武力のような力関係の差は女たちにも意識されていたかもしれない。しかしヒゲは権力の所在がどこにあるかを、また権力というものの内実＝虚構性を極めて具体的に示している。

村の女たちはやむなくゴート人たちの主張、とりわけ宮廷詩人トイデギーゼルの説明を容れて、彼らに服従するよう追いこまれる。もちろん女たちは十分納得しているわけではない。オノバは悲しみに肩を震わせてみずからにいきかしている。「きっとそんなにひどいことにはならないわ」(28)。従属させられた彼女たちを待ち受けていたのは、ゴート人たちの身の回りの世話であった。炊事、洗濯、掃除、くわえて武器の手入れだ。それらを「ゴート人たちの気に入るように」(28)しなければならなかった。要求はうるさい。結局、彼女たちはゴート人たちに手をとられ、自分たちの仕事をする時間すら奪われていく。「一日中彼女たちは主人たちの要望を満たすために走り回りました」(28)。マラカは川で魚を釣り、ティーナは森で薬草を採集し、他のものは山と積まれた皿を洗った。ゴート人たちの世話に明け暮れて彼女たちは自分たちの日常の生活を取り上げられた。

ゴート族の主張と要求は、村の女たちをいわば男に仕える「女の役割」のなかに押し込め、男女の役割を明確に区別しようとするものだとも言い直せるかもしれない。ではそのとき男の、つまりゴート人たちの負うべき役割は何なのか。作者は滑稽なまでに戯画化する。男たちは日がな一日川辺で日光浴するよりほか何もすることがない。料理もできない「生活無能力者」でしかない。彼らはその無能さ故に「権力」や「権威」をみずから生み出してその虚構にしがみついている。その虚構はやがてひとり歩きをして、その虚構を生み出した当の本人たちを縛っていく。虚構が虚構を生み、肥大化していく。ヴァンバ王は本物の王宮を持ちたいという欲求を抱いて、女たちに王宮の建設を命じる。身の回りの世話から王宮の建設へと要求はエスカレートしてとどまるところを知らない。村の半分が王宮の建設に狩り出されるこ

とになった。この仕事は重労働だ。石を切り出し、運び、砂利や水を運び、木を削り、彫りものなどの細工を施す。もはや村人たちには自分のための時間がないばかりか、肉体的にも極度の苦役を強いられることになった。睡眠の時間さえも奪われていく。「疲れと憤りで涙がこみ上げてきました。でもゴート人たちは情け容赦ありませんでした。『世の中とは何といってもそうしたものだ。ヒゲのないものは、あくせく働くよりほかないのだ』とヴァンバはいいました」(30)。ゴート人たちの反応は鈍く冷たい。従属する者は徹底して主人に仕えるべきものだ、そうゴート人たちは考えている。彼らはこの村において支配者を宣言した時点から、命令を下すもの=無為徒食の存在になる。彼らはもはやなにもしない。毎日ぶらぶらと日を送り、天気の良いときは、河原に出て日光浴で日を過ごす。彼らはこうして生活者としての能力を失っていく。仕える者がいなければ、ゴート人たちはもう食べ物ひとつ口にすることができなくなる。

一方村の女たちは生活そのものを破壊され、ゴート人たちに一層強く隷属させられていく。疲労困憊して、次第に思考力や自立の意思を鈍磨、衰弱させられていく。

それでも女たちはそうした苦境から逃れる術を徐々に模索し始めた。このゴート人たちとの主従関係の清算を目指し始めたのだ。それには、ゴート人たちが支配者となって村人たちを従属あるいは服従させることができるとする論拠となっている「ヒゲ」の問題に正面から立ち向かっていかなければならない。この問題を解決して、ゴート人たちの主張するヒゲの効力を無効にしていけないことには彼女たちは屈従の軛から逃れることができない。

それではヒゲの問題を解消するにはどのような方法があるだろうか。考えられるのはふたつしかないだろう。ひとつはみずからヒゲを蓄えること、もうひとつは相手もまたヒゲを持たない、ないしは失うことだ。このどちらも両者が同じ立場に立つこと、または同じ状況に身を置くことを意味している。いわば立場の平準化である。村の女たちはまずこの順序でゴート人たちと同じ立場に立とうと企てた。ここでもまた非武力的な解決方法が選ばれるのも作品自体の論理からして当然だろう。

さてそれではどのように女たちはヒゲを獲得しようというのか。もちろんヒゲが生えてくるわけもないのだから、「にせのヒゲ」を手に入れることになる。その計画を思いついた場面は次のように叙述されている。「ティーナは泉に身をのりだしたとき、水に映った自分の顔を見ました。(中略)そしてそれがまるでヒゲがついているかのように見えました。(中略)そのときある考えがひらめきました。彼女は一目散に風車のところに走っていっ

て、オノバにその秘密の計画を打ち明けました」(33)。彼女たちは明かされたそのティーナの計略を「少しもばかげたものとは思わなかった」(33)ので、その計画の実行に移ることになった。つまり次の日から少しづつ髪の毛の先をゴート人たちに気づかれない程度に切りとっていったのである。こうしてヒゲの材料を蓄え、集めた毛で「にせのヒゲ」を作った。それはたいそう骨の折れる作業だったが、ついに口ヒゲ(Schnurrbart)を作り上げた。どのヒゲもまるで「はえた」かのようなだった。村人のだれもが、年寄りから子どもにいたるまでみんなヒゲを手に入れた。

女たちが一夜にしてヒゲを蓄えている！これはゴート人たちにとっては一大事件であり、「最悪の事態」(38)だった。ありうべからざることが起こったのだ。王のヴァンバも報告を聞いて動転する(38)。なぜならこのことは、その瞬間からこの村での彼らの支配権が消失することを意味しているからだ。

伯爵はゴート人たちの食堂に足を踏み入れたとき、「パンのかけらや、肉をしゃぶられた鶏の骨などがテーブルのうえにころがっていた」(34)のを発見して憤慨する。まずはかれらゴート人たちの身の回りから、しかも食事という生死に直結したところから自分たちの支配が及ばなくなったことを思い知らされる。村人たちは昂然と主張する。たとえばベラはこういう。「ご覧のようにわたしにもヒゲが生えてきました。これからはわたしも支配者のひとりです」(37)。(支配者=Herrは同時に男という意味をも持つ)このときからゴート人たちは女たちに課していたすべての仕事や作業を自分たちでやっていたいかなければならなくなった。炊事、洗濯、掃除、裁縫、宮殿の建設などが一度に彼らの身に降りかかってきた。日常の営みがかれらゴート人たちの手に戻されてきた。反対に村人たちはヒゲを得て自由を取り戻し、自由を謳歌する。「毎晩女たちは再び得られた自由を祝いました」(39)。強いられた隷属、奪われた自由、その喪失のなかで失ったものの大きさ、尊さを知り、再び手に入れた自由を喜ばずにはいられない。

しかしその喜びのなかに落とし穴が待ち受けていた。女たちのヒゲはしょせん「つけヒゲ」だから、女たちは日常の行動のなかで不自然であったり、不自由に感じたりしたはずだ。特に食事のとき、この「つけヒゲ」は不自由だった。「つけヒゲをつけて食事をするのはそれほど簡単なことではありませんでした。女たちはまだ一度もそうした練習をしたことがありませんでした。(中略)そしてそもそも彼女たちはおそろしくかゆくてたまりませんでした」(39)。ヒゲをつけているがために口の周りがかゆくてたまらない。そのかゆみに耐えられなくなった女たちは「食事の間はヒゲをとる」(39)ことにする。

このことが結局は彼女たちの失策となる。この油断がもとで、ゴート人たちにあのヒゲはにせものだったことを知られてしまう。恐ろしい空腹に耐えられなくなった宮廷詩人のトイデギーゼルは、こっそり女たちの解放の宴席に忍び込んで、信じられない光景を目撃する。「女たちはひとり残らずかつてのようにヒゲもなく椅子にすわっていました。彼女たちはおしゃべりをし、飲み食いして、かれのことなど少しもきづきませんでした」(41)。

こうして偽のヒゲであることが露見してしまった女たちは再びかつての奴隷的生活に逆戻りさせられる。「おまえたちはわたしたちをみくびりすぎたね」(42)とヴァンバは勝ち誇る。

ヒゲはまた厄介なものでもある。とりわけヴァンバのように足元まで達するほど長いと、その取り扱いには苦慮することになる。あるときヴァンバは自分の長いヒゲを誤って踏んでしまい、階段の最上段から転げ落ちるといふ災難に遭った。このときはヒゲが災いした。幸いにもケガひとつせずすんだが、二度とこうした事故に遭わないためにもヴァンバは「ヒゲ持ち」を持つことを思いついた。このヒゲ持ちにティーナが名乗り出た。この仕事も、気難しい王にあってはそれほど楽な仕事ではない。このときからヴァンバ王のヒゲは二つの長いお下げに編まれた(45)。「ティーナはヒゲを長いお下げに編んでそれをピンクのリボンで結わえました。(中略)その娘は恭々しく五歩下がって王の後につき従いました。そしてそのふたつのヒゲの端を、服の裾を持つように手に持りました」(45)。

ヴァンバ王の健康も転地のかいあってか、著しい快方に向かった(46)。それとは対照的に村の女たちは逆に健康を害し、すっかり「くたびれ果てて落ち込んでしまいました」(46)。彼女たちの顔は疲労の色が強くにじみ、失意と諦念とに染められていく。今度こそもうゴート人たちの支配から逃れることはできない、そうだけれどが観念したのかもしれない。あるいはそれを自らの運命として受け入れは始めたのかもしれない。

最後は「金(きん)」をめぐる新たな難問が村人たちに降りかかる。ことは、ヴァンバ王が新しい「純金の王冠」を持ちたいと望んだことから始まった。しかしこの村には金がない。ゴート人たちは女たちも狩り出して金探しをするが、ついに金を見つけることはできなかった。村人たちにとって金は何の魅力も価値も持っていない。その意味で、金は造られた象徴的な価値を持たされているにすぎない。ゴート族の側からの価値認定であり、金は権力を生み出す象徴的な物質だといえよう。そしてそこにも男性の側の原理が働いている。なぜなら金は村の女たちにとってただの物質にすぎない。金は、食べられも

しなれば、身にまとうこともできず、ただ強い光を発するだけのものにすぎない(46)。つまり生きていく上で不可欠のものではない。なくとも生活上何の差し障りもない。女たちの世界には、金が占めるべき場所はどこにもない。王冠もやはり彼女たちの生活のなかで何の意味もないものだ。したがってこの王冠によって象徴される「権力」や「権威」と言ったものも彼女たちの前では何ら効力を持ちえない。金=王冠は権威と権力の象徴であり、その意味をより強調しようとするのがヴァンバ王の意図にほかならない。しかし権力と無縁のところまで共同体を築いてきた村人たちにとっては、金も王冠も外部から導入された価値=虚構でしかない。

作品の後半にもうひとり興味深い人物が登場する。この人物もまた外部からの訪問者であり、ヒゲを蓄えた男である。竜や化け物を退治して歩く騎士と言うふれこみだ。村の女たちにとっては敵対し、苦痛を強いるゴート族はいってみれば「竜」のような存在、つまり恐怖と不安の対象、忌まわしき存在にほかならない。だから失意と絶望のうちにあった彼女たちにとってこの「竜退治の騎士」が救世主と映ったのも当然である。しかしこの「騎士」ほどくわせものはいなかった。この男は、結局は女たちを窮地から救い出すどころか、逆にゴート族側に寝返り、抑圧者として村人に対峙して彼女たちをいっそうの苦境に追いやっていく。

この男はゴート人たちとも女たち(村人たち)とも異なる特徴を備えている。その登場の仕方からも明らかのように、組織に所属しない単独者で、いわばアウトローのような男である。自分だけの才覚で生きていくことを選んだ単独者ともいえるだろう。同時に各地を転々としていることからいえば、安住を好まないともいえる。そして何より利に敏い。この男は必ずしも純粋に善意から村人たちに手を貸そうとしているわけではない。一種の商取引として助力を申し出ているし、その見返りとして衣食住の保障を要求している。「『それでは取り引きに入りましょう』とその他所者はいった。『この世にはただなんでものはなにひとつありませんからね』」(51)。ここでの助力はこの男にとっては商売の種にすぎない。

この男がもともと狙いとしているものは「金(きん)」だ。「金はないのかね」(52)と男はすぐさま村人に尋ねていることからそのことは容易に窺い知ることができる。このことは男がゴート人と同じように金に関して価値観を共有していることを示すものだ。とはいえもちろん金のもつ意味も機能も子細にみればまったく異なっている。ゴート族にとっては金は王冠=権威の象徴としての意味合いを持つものであり、いわば抽象的な価値を持ったものだ。しかしこの他所者は金を明らかに商取引の具

として位置づけている。このことは金が「貨幣＝通貨」としての意味合いを持たされていることを示している。この意味合いの違いは大きいと言わざるをえない。ゴート人たちに商取引きの概念が欠落していることは、村人たちとの接触の仕方からも見られるとおり明らかであるから、この男は彼らゴート人とは別の世界の住人といわなければならないだろう。この男を位置づけようとするれば、いまなら騎士というよりは「商人」と呼ぶのがふさわしい。

この男から立ち昇る空気は村人たちにもゴート人たちにも違和感を覚えさせる。その要領のよさとホラとしか思えぬ武勇伝からゴート人たちは次第にこの男のうさん臭さを感じ取っていく。もっとも王のヴァンバだけはかれにある種の親近感を抱いているが、それは、王というものがもたざるをえない孤独がこの男の体臭に一脈通じるものを嗅ぎとらせていたからかもしれない。ヴァンバもまた共同体の中の孤独を強く意識しているからだ。

さてこの新たな他所者の出現によって事態は女たちにとって一層悪くなった。いままで以上に収奪は強化され、窮地からの脱出はますます絶望的にみえてきた。加えてベラは獄につながれることになってしまった。犠牲者がでたので、「女たちはいままでと同じようにあくせく働きました。時々夜中にこっそりと後ろも振り向かずには逃げたいと思いました。でも彼らの誇りがそれを許しませんでした。またどこか他所で生活を新しく始めるエネルギーもありませんでした」(61-62)。事態は一層深刻になったといわざるをえない。打開の道をどこに求めるか。また救われる道はまだ残されているのか。あるいは逆境を切り抜ける力はまだ残されているか。

女たちはかつての生活を思い出しては嘆くよりなす術もない。あるいはいたずらに嘆くことを嫌って昔の生活を忘れようと努めるほかなかった。しかしそうしたなかにも強い意志をもって現状の打破を目指すものはいた。ティーナだ。彼女は発想を逆転している。「もしゴート人たちにヒゲがなかったらどうなるの」(62)。そこからゴート人たちのヒゲを剃り落としてしまおうという計略に発展し、女たちはこのティーナの着想に最後の望みをかけることにした。この企ての根底にあるものは、相手の特権的な持ち物（それは女たちにとっては災いの元凶でもある）を奪い取って（あるいは抹消して）差別と隷属を強要するその根源を退治し、ゴート人たちを自分たちと同等の場に引き下ろそうとすることだ。しかし、この企ての結果がもたらしたものは、その意図を超えて思いもかけない新鮮にして大きな成果だった。

ヒゲを失ったゴート人たちは互いに相手を認識できなくなる。特にヴァンバ王は近習のものですら見わけがつかない。伯爵はベッドから落ちたヴァンバをつかまえて

怒鳴りつけている。「おまえはなにものだ。われらが王の部屋で何をしていた。さあ、言え」(75)。ましてや牢番の男（しかも囚人に逃げられて狼狽している）には王であることを確認できようはずもない。ヒゲを失ったヴァンバ王の顔には「白い」それも「子供のお尻のように柔らかい」皮膚(70)がのぞいていた。

混乱の末にゴート人たちは互いにヒゲがなくなっていることに気づく。「いまごろになってやっとゴート人たちは自分たちがもう本物のゴート人ではなくなっているのに気がつきました。彼らはお互いに顔を見合わせ、初めは信じられないびっくりした顔をしていましたが、それからプツと噴き出しました。伯爵はトゥルガを笑い、トゥルガは公爵を笑い、公爵は筆頭大臣を笑いました」(75)。互いに彼らはまったくの別人を目の前に見出したのだ。そこには「正真正銘のゴート人」はもういなかった。ヒゲがあつてこそそのゴート族であるなら、ヒゲをもたないゴート族はもはやゴート族ではありえない。ヒゲこそ彼らゴート族をゴート族たらしめるものであり、かれらのアイデンティティそのものだ。ヒゲを失った時点で彼らはゴート族という集団が振りまく幻想・幻影から解き放たれたのだ。彼らは個に分解されてしまった。互いの顔を見て笑いあう姿はそうした彼らを映し出すものだ。分解された個が彼らの屈託のない笑いを誘い出している。

「ヒゲがなければ支配者ではない」(76)というティーナの指摘を待つまでもない。「ティーナの言うとおりでした。それはびっくり返しようもありませんでした」(76)。再び女たちは自由を獲得し、歓喜する。その翌朝の祝いの宴席に、彼女たちはゴート人たち他所者を残らず招いた。それはかれらの和解の宴ともなった。ゴート人たちはひそかに再びヒゲの生えて来ることを期待するが、次第にその期待をも忘れ、ついには「ゴート人たちはかつてヒゲを蓄えていたことを次第に忘れていきました」(77)。

ヒゲはゴート人をゴート人たらしめていたばかりではない。彼らの文化、社会、慣習や生活様式と言ったものまで彼らの存在と生活のすべてを象徴するものだった。そのヒゲを蓄えた彼らも実はまた、逆にヒゲに呪縛されていたことを、ヒゲを失って悟ることになる。なるほどヒゲはゴート人たちの誇りを示すものであり、かれらのプライドを支えるものであった。しかしまたかれらが引きずる様々な固定観念をも表現していた。ヒゲの喪失は彼らに虚構からの解放ともろもろの呪縛からの解放をもたらした。その解放が新天地でのかれらの生活を可能にすることを暗示している。

最後にこの作品で示されている「忘れる」ということについて触れておきたい。ゴート人たちは故郷を忘れ、



妻子を忘れ、故郷でのかつての生活を忘れ、生きて行くために必要な力・能力を忘れて失い、ついには自慢のヒゲすらも忘れる。そしてまた村の女たちは去って行った男たちを忘れ、彼らとともにあったかつての生活を忘れる。この作品では忘れるということが、おかれた負の境遇や立場を乗り越え、新たな好ましい状況を生み出していくうえで否定的、後退的に働くものとして受け取られているわけではない。むしろ作者は忘れることの持つ積極的・肯定的側面を評価して、その力を具体的に描いてみせているとあってよいだろう。忘れることで、ゴート人たちも村の女たちも失われたものを悔やまず、嘆かず、振り返らず、前向きに打開の道を求め、生きるための方途を探る力を内から汲み上げている。もちろん言うまでもなく、記憶にとどめておくことの意味が作中で軽視されているわけではない。「記憶する」ということと並んで、「忘れる」ということの持つ働きが、ひとが生きていくうえでどのような意味を持ちうるかを、読者は再考させられるだろう。人生の様々な局面において、ひとはあるいは記憶と忘却の力のバランスを無意識にまた微妙に保って生きているのかもしれない。

この作品は、現代の男女の役割、家族や家庭、労働、権力、支配と依存等の身近な問題を考えるうえで多くの示唆に富むヒントを与えてくれる。そしてその問題の大きさと重みにもかかわらず、作者ハックルは何より楽しい物語の世界を読者に展開してみせている。

## 註

- 1) 松谷健二『東ゴート興亡史』16ページ以降「民族大移動」の項参照
- 2) アト・ド・フリース『イメージ・シンボル事典』「あごひげ」の項参照

## テキスト

Erich Hackl: König Wamba. Diogenes Verlag, Zürich  
1991

文中のカッコ内の数字は本書のページ数を示す。

## 参考文献

- Walter Vogl: Epitaph für ein Zigeunermädchen. Erich Hackl erinnert an gegenwärtiges und vergangenes Unrecht. 『慶応義塾大学 日吉紀要』ドイツ語学・文学19号1994 S.115-128所収
- 松谷健二『東ゴート興亡史』白水社 1994年
- アト・ド・フリース『イメージ・シンボル事典』大修館書店 1984年